明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　毎月一回二日發行

家庭雜誌

第貳卷
第三號

明治三十七年三月二日發行

日本婦人の二大迷想（村井知至）……一
戀しき雲…（詩）……五
戰爭と婦人（幸德秋水）……六
最近に於ける日本人の壽命……一〇
大和正男の話……一一
自然が與ふる春の摘草（久田二葉）……一七
△ミヽナグサ△ヷレモカウ△ヤハズサウ△リヤウブ△ミメナ
△カワラケツメイ△タンポヽ△ツクシ
鰐魚奇談……二〇
子なり父なる貧しき兵士に寄す……二四
戰場の血……二七
新婚の姪に與ふる書（堺枯川）……二九
婦人界の活動
戰爭の半面……三一
編輯錄事……三二

由分社

東京市京橋區新湊町一丁目十七番地

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭の常備藥

腦力を明快にし永年の腦病を全治す

腦病

腦病は耳鳴。目かすみ。逆上して便通少なき人男女とも常に頭痛にて苦しむ人婦人血の道にて頭痛眩暈し氣鬱き悲み易く怒り易き人其他常に腦を勞する人及び神經家は常に持藥として此藥を服用せらるべし

頭痛精靖丸

藥價
金壹圓
金五拾錢
金参拾錢
金貳拾錢
金拾錢

頭痛

永年の腦病。神經病も必ず全治に、又此藥は病症の何たるに拘はらず總ての頭痛に特効あるを以て家庭の常備藥として貯へ置かば常に自家不時の要に供するのみならず時に人助けとなることあるべし

本舗 東京日本橋藥研堀町 高木與八郎
市内は勿論全國至る處の藥店にあり

●本誌定價及廣告料

一部	一ヶ月	六ヶ月	一ヶ年	全國
金六錢	金六錢	金卅二錢	金六十錢	無遞送料

廣告料――特別一頁七圓、普通一頁五圓

注意

一、本誌は毎月一回(二日)發行とす。
一、本誌の購讀料は小爲替を以て御遞送の事。
但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事。
一、購讀者は住所姓名を詳細に記して申込まれたし。又轉所の際は新舊の宿所共併せて御通知あるべし。
一、爲替振込局は芝口局宛受取人は由分社宛の事。

明治三十七年三月一日印刷
明治三十七年三月二日發行

發行兼編輯人 東京府豊多摩郡千駄谷村字原宿百九十一番地 西村渚山

印刷人 東京市京橋區日吉町十番地 中村彌助

發行所 東京市京橋區新湊町一丁目十七番地 由分社

大賣捌所 上田屋 良明堂 東京堂 東海堂

印刷所 東京市京橋區日吉町十番地 近藤商店

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雑誌
第二巻 第三號

日本婦人の二大迷想

村井知至

迷想は迷信である。

第一――女子は必ず男子に嫁すべきもの。この迷想こそ、實にわが日本國民の脳底に深くも染込んだ一つの観念であつて、男子の側から別に疑ひを挟まねば、女子の方も矢張正當の事として微塵も夫を疑はぬ。成程それは無理はなからう。昔時の所謂女子教育の方針なるものは、一に『女子は嫁すべきものと』云ふ條件は根本に置いてあつた。

有名な『女大學』を繙いて見ると、一番最初の條にかう書いてある。『夫れ女子は成長して他人の家へ行き、舅姑に仕ふるものなれば、男子よりも親の教を緩にすべからず。云々』而して、其全篇を通讀するに、前後主旨一貫、飽く迄も『女は皆な嫁入するもの』と云ふ事を説いた教訓の外、何物をも發見せぬ。

併し乍ら、これ等はもう遠き過去に屬して居る事であるから、幾度び繰返すも詮がない。われ／＼が大に依頼し、大に囑望しつゝあるのは、とりもなほさず今日の教育法である。明治の新教育である。然らばこの明治の新教育には果して舊時代的教育の病弊が、遺憾なく取除かれたと云ふ形跡を認め得るか。私は決してさうは見ぬ。現今も同樣である。昔時の精神と少しも異つた點がない。其證據には、近頃東京の各區内に顯はれる多くの女學校の教育方針なるものを見聞きするに、校規の第一條に『本校は良妻賢母云々』の文字が必ず出て居る。して見ると、矢張女は嫁入するもの、嫁入せぬ女は女であつて女でない。と云ふ意味が其裡に讀まれる、英國の諺に Women are wives or nothing. と云ふのがあるが、丁度此思想と相符合したもの、と云つても可い。明治昭代、二十世紀に於ける我日本の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子教育の方針が、未だに這般の舊式なる主義の下に抑壓されて居るとは、一體、何たる不見識であらうか。

更に目を轉じて、社會一般の人が今日抱きつヽある對婦人意見に就いて考へて見ても解る。世人が獨身で居る婦人を見ると、窃にこれを擯斥しやうとし、若くば之が奬勵に盡力する人に對して、あらゆる妨害の手段をめぐらさずには置かぬ。思ふに、彼等の頭腦には、『女嫁せざれば即ち廢物なり』てふ思想が根本的に染込んで居るのであらう。さればこそ、世に人の親となれる人々が、其年頃の娘の爲に苦心配慮を重ねる事は一通りの事でない。女の子を持つた兩親が、自己の快樂や何かを犧牲にして、慘憺たる經營に憂身をやつすのは、只これ娘の嫁入先をこしらへると云ふ事の上に外ならぬ。娘已に二十三十となり、良妻賢母主義の敎育は充分に仕込まれてあるにも係らず、嫁入るべき緣家を見出しかねた場合などには、兩親はどんなにそれを不面目に思ふであらう。人に顏を合はすさへ恥ぢて外へも出ぬと云ふやうな調子。現今の處では寧しろこれが正當な事と考へられて居るけれど、大なる迷信である。太しき謬想である。

これに準じて、又娘の側にもこの迷想が離れない。今日の女子で、結婚の事を苦にして居ないのは一人もなからう。現に女學校の卒業期にでもなると、學生は寄ると觸ると近き未來の結婚問題を喋々して、一も其他の話題に時間を費すものはない。

『誰々さんはあの方の許嫁なのよ。』

『何子さんも矢張さうなの。』

など、他人の緣談を羨しげに聞傳へ、かくして内心では全力を擧げて互に婚を競ふと云ふ姿である。而して、若しも其時分になつても約束なきか、緣の遠い境遇にでも居るならば、其人は非常に肩身狹く感じて了つて、一圖に不幸なものとのみ自分を思ふ。これが今日の女學生の常態である。この調子を以て推して行けば、今日の婦人が敎育を受ける事に熱心なるは、何も天賦の性情と才能とを圓滿に發達せしめたいと云ふ考のあるのではなくして、單に婚家を早く見付けたい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見付けたいについては相當の教育をつけて置く必要がある。とかう云ふ淺薄なまづい考へから割出された結果なのである。既に本人がさう云ふ願ひであるからには、其兩親とても決してそれ以上の見識を持して居やうとは思はれぬ。かくて、衣服を着飾り、脂粉を施して、只寸時も早く人の妻たらんとする。此時に當り、偶々新思想の中に養はれた一女子、意氣地のない同輩の見識から一頭地を拔き、獨身で以て身を立てやうと云ふ意思を持つたとするならば如何。世間は必ず其女子を見限るであらう。友人は共に談ずる事を屑しとせぬであらう。否、其世間から見限られる迄に、其友人から見棄てられる迄に、彼女は屹度早速に挫折する、志を一變する。獨身で起つと云ふ事は良心の許さぬ罪惡の如くに思はれて、直に又當初の意久地なし仲間に立戻るに違ひない。私の妹が丁度それの好い雛形であつた。

　すべて日本の女と產れた以上は、獨身で居ると云ふ事が決して出來ぬ。又、假令自分丈は獨身で居やうと決心して居ても、外からいろ〳〵と縁談を差向けて來る。即ち社會其物が女の獨立的生活を許さぬのである。中には氣丈な女子があつて、混沌たる此時代思想の間を通り拔けおほせた人がないではないが、それとても大抵は半途にして我を折つてしまう。學識あり、才幹あり、特に洋行迄して來た女さへ、自分と比べて其地位、智識共に遥かに下つた男子に嫁するやうな例は少なくない。これと云ふのも、實情を探れば、社會の眼が恐ろしいからである。父母友人共の干渉に堪へ得ぬからの事である。

　蓋し、これ實に野蠻時代の遺物に外ならぬ。

　西洋では、女子に『女は嫁入するもの』と云ふ觀念がない。娘を持つた兩親は、其娘に教育を施すに當つて、將來の才能を發達せしめたいと願ひこそすれ、結婚云々の點に於ては何等關する處もないのである。元來結婚は云はゞ一種の偶然の出來事で、決して結婚其物は當初からの目的とはして居らぬ。娘の側から見ても矢張同樣で、初から嫁入する事に

は少しも考へを向けて居ない。只々自分に授かつたものを、如何にして遺憾なく開かしめ、而して如何にして是を働かすべきか、と云ふのが彼女の苦慮する所であらう。西洋では老嬢と呼ばれた一種の娘があつて、四十五十と云ふ年齢になつてから、初めて結婚するやうなのが澤山ある。併し彼等が其年齢になる迄、思ふ相手を待つて居たのかと云ふにさうではない。彼等は其時迄結婚の事は毛頭だも考へず、自分の思ふ通りに獨りで社會に働いて居たのであるが、不圖した事から良人を持つと云ふ機會になつた譯で、其結婚に何も深い歷史や物語が含まれて居るのではない。

一體女子の教育と申すものは、女子をして一個の人たらしめると云ふのが其主眼でなければならぬ。他語を以て云へば、女子教育の本元は人として教育する事にあるので、其結果、女らしい才能を世界の文明の上に發揮せしめる——これが第一の要件である。學校が妻君の製造所にならうとは、餘りに笑止の極ではあるまいか。

今日我國の女子が享ける處の幸福なるものは、全くの僥倖で、眞の幸福とは云ひ難い。何となれば、女子が運好くして頼しい良人を持つた場合には幸福であらうけれど、若しこれに反して、宜しからぬ人の許に嫁するなれば、大なる不幸と云はねばならぬ。これ主として女子が結婚と云ふ事に、餘り重きを置き過ぎた原因の致す處で、眞の教育が普及され、常に實力を養ふと云ふ考が女子の頭腦に宿るやうになつたならば、決してかゝる貧亡鬮を引くやうな結婚は行はれぬであらう。これのみならず、今日の如き狹隘な教育では、さらでも小なる女子を益小にする斗りで、社會の文運に貢献するものと云へば一つもあるのではない。元來女子には特有の能力があつて、女でなければ出來ぬと云ふ事が澤山ある。女子が文運に貢献する事の出來るのも、この才能の發展に外ならぬ。併して、女子教育の目的が只良妻賢母を得る事斗りで、些少もこの能力發展の事に及ばなければ如何。世にこれ程悲慘な事はない。これは生き乍らに女子を暗所に葬り去ると何

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の選ぶ所があらう。

かの路傍の勞働者を見よ。彼等の内には教育次第で、世を驚かすやうな英雄が居ないとも限られぬ。併し、彼等は幼少の時分から貧賤の爲に逆待せられ、終に花咲かずして萎れて了ふ。丁度この道理は女子も同樣の運命を荷つて居る。彼等で貴き美なる性情を充分に發揮する機會を得ずして、空しく竈の前や火鉢の前で老ひ果てゝ了ふ。彼等の中には音樂の天才もあらう。美術の大家となるべき人もあらう。而も、彼等は終に無爲にして死なねはならぬ。これを小にしては女子の果敢なき運命とばかりであらふけれど、大にしては方に社會の大損害である。社會は其文明に一助力者を失ふた勘定である。かく觀じ來らば、今日迄の我國の文明は、男子の文明であつて、女子の文明

戀しの雲

（花外詩集より）

戀こそ見えれ顯見えぬ雲の
少女の戀しさよ、かひなき
人の手を伸べて嗚呼いくた
びか雲の裳捉へんとては仰
ぎけむ。」
いかにやさしき音が心、地
に息する人よりも空の乙女
に戀すとは、姿かはれど自
由なる氣高き雲の美しや。」
黄金權威の跋扈する暗く穢
れし土蹴りて無限の天に登
りたや、あゝ風となり雨と
なる雲と下界に臨みたや。」
家をも知られ漂渺と行衞定
めぬ巽塵ふ世にもはかなき
戀やこれ、雲を思ひしその
日より心は天にうつゝな
り。」

ではなかつた。即ち片輪の文明であつた。

世には又小心細慮の人あり、動もすれば女子新教育策に横槍を入れて云ふ。「人口の減少を如何せん。」と、安心せよ。一時はよし獨身女生の增加を來す事があらうとも、それが爲に、結婚の廢滅を見るやうな虞は決してない。かくして女子の地位を進め、女子の價値を上げたならば、今日の如く、女子の方から緣談を探しにまわるやうな醜態を演せずとも好い。理想の求婚者は却て四方から其身を圍繞して來るであらう。而して、これがやがて、西洋の所謂自由結婚の初めとなる。

私はこれで第一迷想の一段落とし、更に第二の迷想として『女子は必ず男子に從ふもの。』と云ふのを述べたいが、是は又次の機會を待つ事とし、結論として少しく婦人と社會主義との關係を語らう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社會主義實行の社會では、日々の糊口に差支へるといふ心配がない。其社會で最も重きを置くものは教育で、如何なる高等の教育でも、各人平等に無報酬で受けることが出來る。別けても婦人に對する教育は、頭から人てふ見解を以て事に當り、婦人は又自己の嗜好が一番に向くと云ふ、職業に從事する事が出來るから、各自の學問職業は從つて各自の樂事となる譯である。

一言にして云へば、社會主義とは婦人の心である。云はゞ、女の心を盗んだのではないかと思ふ程好く似て居る。平和にして愛の住家たる家庭の趣味をして、廣く社會の隅々迄も波及せしめたいと云ふのが、社會主義の本願である。

婦人と戰爭

幸德秋水

日露の平和は終に破れ、今や兩國が干戈を交ふるの不幸を見るに至つた。此際我が婦人社會に對し、是非共一顧を煩はさねばならぬ一事は、婦人と戰爭との關係と云ふ問題である。

軍人の妻の申分に曰く。

『主人の留守中は出來る丈綿密に家事を取纏め、絶へて内顧の憂のないやうにして行かねばならぬ。』

而して普通人（軍人以外）の妻も亦曰く。

『妾は捐金をしてゝも幾分か國の爲に盡したい。それとも又せめて看護婦ともなつて、憫然な負傷兵の世話をばして見たい。』

戰爭に對する婦人社會の同情と覺悟はかくの如くにして、今は只此一所に集つて居る、現存の新聞紙は擧げてこれを稱贊し、但しは之を慫慂せんとするに忙しい。

余の意見を以てするに、こは寧ろ普通平凡の事に過

きぬ。人生の花たり美たるべき女性社會に於ては、今の時宜しく一歩を進めて、愼重に思念する所がなければならぬ。思慮すべき問題とは何ぞや。曰く婦人と戰爭との關係、詳言すれば、今回の戰爭が婦人の地位や權利や、若くば利益の上に如何なる結果を齎らすべきか。これである。

ある婦人はこれに答へて云ふ。

『其樣な事は知らずとも宜いでせう。只殘念なのは妾が男に産れなかつた事です。男なれば妾は眞先に出陣しますのに……』

成程勇しい考である。若し戰爭なるものが、世の中の婦人に利益を與へるものであるならば、それはもうあらゆる手段を講じて、戰爭を奬勵する必要があらう。併し乍ら、不幸にして其戰爭が婦人に害惡を持來すならば、一瞬の遲速を爭ふてもこれを遠く人生の外に放逐してしまはねばならぬ。

然らば、假りにこれ等の調査を遂げんが爲に、先づ昔時からの歴史に就て見よ。戰爭は婦人に些の利益をも寄與しては居らぬ、日々の號外に心を奪はれる程の好もしいものではなかつた。凡そ人生の圓滿に發現せらるゝの時期と云ふのは、男性が強き力を發揮し、又一方に於て女性が優美な性情を發揮して、倶に宜く結合した時分にある。

余は今日我國婦人の地位の低きを以て、直にこの戰爭に起因するものと斷ずるものである。若し昔時に於て戰爭と云ふものがなかつたならば、婦人の地位は斯程迄に低くなつて居らぬ筈。即ち知る、戰爭は婦人に一つの幸福をも運ばなかつた。戰爭は婦人にとつて惡むべき不利益を釀させた。

此に於て余は再び問題を提起する。戰爭其物が出現する所の理由に至つては姑く措いて論せず、只何故に其戰爭の結果が、一般の婦人を壓迫して今日の如き低き地位に屈從せしめるに至つたか。

答辯は甚だ易い。世界は戰爭の歴史である。而して、男子はこの戰爭場裡の人となる丈の腕力と體格とを自然に享けて居た。併し女子には其二つの物が缺けて居

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。戰爭、腕力の時代に於て、女子が常に男子の活動範圍外に置かれて居たのは、全く自然の數と云はねばならぬ。

往昔野蠻時代にあつては、日夜爭闘をのみ事として居たから、勢ひ女子の必要を認めず、偶々女の子の出產すると、慘酷にも殺して了つたものである。而して、子孫を繁殖する一つの手段としては、常に敵の方から成長した女子を生捕つて來て、其需用を滿たす事になつて居た。斯くの如くして、戰場に出る事の出來ない女子仲間は、男子の方から疎んぜられ、終にそれが嵩じて屈辱の地に逐込まれるやうな始末となつた。特に、男子は先天的に武藝に長じ、戰略にも秀でゝ居るから好戰の念は愈々強く、從つて人心が殺伐となつて、弱き女を壓制するなどの事は、彼等一向何とも考へぬ、今日迄の歷史は炳乎として之を證明して餘りある。

婦人が男子にも劣らぬ名をなした時代は何時にあるかと云へば、それは天下が太平であつて、朝野共に文藝を樂む事の出來た時代であつた。亂世にあつては決して才媛の出た例がない。尤も大力を有する女豪傑は出たかも知れぬ。巴御前や板額の徒が即ちそれである。併し乍ら、我々が常に要求するは、何も巴御前や板額のやうな殺風景な女子ではなく、それは優美なる紫式部の如き人なのである。

平生我々が淨瑠璃本などを繙いて、目の觸るゝ文字の中に、『女の身として云々。』と云ふ事がある、又、太閤記の中にも、光秀が其妻に向つて、『女童の知る事ならず？』とある。戰國では兎角かうで、社會は總て男子の獨占舞臺、婦人が優美なる感情を發露しやうと云ふ事は到底不可能の事に屬して居た。即ち昔時にあつては、女子は殆んど極度迄無視されて居た。實に其悲慘無慈悲、女子の蒙つた不利益と屈辱は云ふに忍びぬ程のものであつた。

翻て今日の日本婦人、戰爭に對する氣丈な覺悟は成程勇しからう。又凜々しいには違ひないが、而も其勇しく凜々しき振舞の裏に於て、恐るべき闇黑の影を認めざるを得ないのは痛嘆に堪へぬ。第一には家庭の

破滅である。ある新聞紙の報ずる處に依れば、一軍人召集令に接して其場で妻に離縁状を書いたと、惟ふに舊時代の社會では、始めより女子なるものを認めて居なかつた事故、これを未練氣のない武士の振舞としては、或は勇しい仕方であつたかも知れぬ。が、文明的に云へば左程にも賞揚すべき理由を見ないのである。

國家の爲めと云ふ犧牲的の觀念は結構だが、それか爲に美しい家庭の樂みを犧牲にしなければならぬやうな社會は、決して完全なる社會と云ふ事は出來ぬ。我々の希望はこの家庭の樂みを犧牲にしない新社會を實現させたい、即ち戰爭のない世の中が欲しい、良人出征後の淋しき家庭、新聞紙上では種々に賞めたり勵ましたりして居るけれど、後にて考へると實に悲しい。嬉しいと思つたのは却て迷ひである。今日以降、孤獨で財政を處理し、小兒を撫育し、而して無事に凱戰する良人を待つと云ふ覺束ない覺悟に戻つた時、彼女は如何に深き悲痛に少さき胸を破らるゝであらう。

更に其兵士は如何に、彼等の中には新婚の甘き夢まだ覺めも敢へぬ花婚もあらう。或は病褥にある親と生別の盃を擧ぐるの子、或は幼妹と別るゝ兄、或は家内多き貧家の柱。社會はかゝる悲慘なる背景を目撃し乍ら、只異口同音に其勇氣と忠愛の精神とを稱讃し、毫もこれ以上の考慮に出づるものがないのである。

妻は良人が出征の首途にまづ注文して曰く、

「澤山敵の首を取つて來て下さいよ。」

と。果然戰爭てふ殺伐の空氣は、終に世の女性迄も同化し去つたのである。併し、この殺伐の氣を社會では持囃す。戰爭は何處迄も婦人の精神を卑しうするのであらう。現に此度の旅順の海戰にも、妻あり子ある人が即死を遂げたのが若干あつた、飛報一度び到つた時、彼女は如何なる悲嘆に身も世もあらず感じたらう。併し乍ら、思つた事を其儘に發露すれば、直にそれが人目に觸れて卑怯だとか未練だとか、石より冷い批評を受けねばならぬ。彼女はそれが恐しさに態と情を殺し落付拂つて微笑んで居ると云ふ有樣。即ち戰爭は一に優美なるべき女性の心を殺伐に變じ、虛榮心を増さし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

め、偽善の假面を被らしめる。それと同時に、戰爭はまた軍人其自身の心を驕慢にし、若くは自暴自棄に陷らしめ、自己と國籍を同うする婦女子に對してさへ、幾多暴戾殘虐な行爲を敢てするものがある。

又戰爭と云ふものは必しも勝つものと定つては居らぬ。若しこれが不幸にして敗を負はねばならぬ時分が來たとすれば如何。第一に外人の侮辱を受けるものは婦人である。而してそれが婦人の運命である。

かく考へて來たならば、戰爭する事を非常な光榮の如くに思ふのは不量見極まる。決して浮かれて居るべきでない。故に余は曰く、婦人はまづ戰爭が其一身の上に如何に影響し來るかを吟味せよ、而して、戰爭の爲に力を盡すよりは、却つて世界の平和の爲に盡碎する所あるを要す。今日の婦人の敎育は悉く戰爭的である。かくの如くにして、婦人の地位は何時高めらるゝであらう？婦人の幸福は何時快復せらるゝであらう？世の婦人が男子と同等の幸福を期待するならば、第一に戰爭のなき世を願はねばならぬ。戰爭なき世には男子の腕力ばかりが左程に必要とも思はれまい。婦人の天賦の性情は、此時に至つて初めて尊重せられ、渴仰せられ、そこに爛熳たる花は開くであらう。

最近に於ける日本人の平均壽命

最近我邦人の生存平均年齢は三十八歲より四十歲のあいだで、英國人は平均五十二歲だといふことは、前の海軍々醫總監高木兼寛氏の調査である。ところで、英人は昔よりかく長命で、邦人はかく短命なりしかといふに然らず。英人は今より凡そ六十年以前には平均四十二歲位であつたといふことである。又我邦人については大古のことはあまり精密にはわからぬけれども、歷史によりて考ふるに、神武天皇より崇神天皇まで十世間の御齡平均は百七歲、應神天皇より仁賢天皇まで十代のそれが六十八歲、桓武天皇より宇多天皇までは五十四歲。と云つたやうに次第に短縮して、殊に現今まへにあげた三十八歲乃至四十歲といふに至つたのである。英人は年々其平均をまし、我は年々これを减少す。且つ彼れは身體偉大にして長く精力の衰へざるに、我れは矮小にして早く老衰する。其一生間の働きの差はいかばかり。今後大に運動をつとめ、衛生を守り漸次其恢復をはかるが目下の急務であらう。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大和正男の話

吉田抱水

（上）

負けるのが嫌ひな大和正男は今年十三歳になりまして、至極活潑な男兒で有つた。

九ツに成る可愛らしい、直ちやんと云ふ妹を一人持つて居りましたが、正男さんには阿母さんしか御座いませぬ。お父さんは六ツの時、一等軍曹で臺灣へ戰爭に行き或激しい戰鬪の折に、多勢の兵隊と名譽ある討死を爲ちやつたのです。

正男さんは大の軍人好で、必ずお父さんより出世をして、其復讎を取つてやると、始終此事を忘却ませぬのでした。併し正男さんの家は、貧乏で充分に學問をすることが出來ず、學校も尋常だけで退つて了つた口惜さ、現今は英國人のヒユース氏が商會に、使丁を勤めて居るのだが、時折想出しては殘念に堪えなかつたのです。

或日曜の事で、今日は商會も休みですから、正男さんは例の通り、妹の直ちやんと一緒に、四疊半の暖かい窓の下で、自分の學課と直ちやんのお復習の、手傳ひをして居りました。是れが直ちやんの好きなお向ひのお婆さんの、常感心する處なので――。

軒端には雀の親子が樂し相に囀つて居りますし、柔かな風に珊々と散る、痩せこけた門柳の葉は、靜に窓の障子を叩きます。道には軍歌の聲、勇ましく唱つて行くのは、何れ三人四人と連立つた生徒の遠足するのであらう。此日は眞に結搆なお天氣でした。

正男さんも直ちやんも、阿母さんから些と遊んで來でと許されましたが、矢張勉强して行きませぬ。

直ちやんは兄さんの方を向いて、

（直）兄さんは、日本で誰が一番豪い人と思つて。」

と訊ねました。正男さんは恰度軍人の樣な儼乎した口調でもつて、

（正）其れは楠正成だ。いゝ、そら、直ちやんが楠公を讀んでお話をしたらう。ね。正成が豪いと僕は思ふのだ。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

(直)爾う。妾は太閤樣よ。太閤樣の方が豪くつて。」
(正)何故？」
(直)だつて貧乏な約らない人から出世したんだもの德川家康より豪らかなくつて……妾は太閤樣。兄さんは——。」
(正)僕は何うしても正成だ。楠正成は天子樣をお助けした忠義な人だから、太閤樣より餘程豪いよ。」
(直)爾う。其んなら、和氣淸麿も豪くつて。」
(正)爾うさ。武内宿禰も好きだ……直ちやんは女の癖に、日本の豪い人を訊いて何にするか。」
ホヽヽと直ちやんは莞爾に笑つて、
(直)あの昨日先生が皆に問いたの。」
(正)直ちやんは奈何お答へしたえ。」
(直)今の太閤樣よ。」
直ちやんは今迄お裁縫をして居りました、阿母さんの方へ顧回いて、
(直)阿母さん、正成と太閤樣と何方が豪い人か敎へて頂戴。」

と訊ねますと、阿母さんは例の通り優しく、針の手を止めまして、
(…)阿母さんは、正成も太閤樣も豪い人と思はないよ。」
二人は覺えず眼を瞠つて
(正、直)其んなら何誰？。」
(母)あのお天子樣—。」
(正)爾うだ。爾うだ。直ちやん全く爾うだよ。天子樣だ。天子樣より豪い人は有りやしないよ。」
(直)爾うね。
と兄妹は今更得心しますと、阿母さんは、
(母)正男さん。お前のお父さんは國の爲めに、一身を捧げなすつたのですが、定めて御存知でせうね。」
(正)阿母さん、僕は忘却やしませぬ。」
正男さんは一膝乘り出しました。屹となりまして、
(正)阿母さん、お父さんは忠義でせうね。」
(母)其樣な事を、世間の人達に言ふのぢや有りませ

ぬよ。宜しいかえ。只正直に勉強して、お父さんがお父さんだから子も子だ。豪いものだと云はれなければなりませぬ。」

(正)唯。」

正男さんは、神樣に上から壓へられた樣な心持で、頭を垂れました。阿母さんは、さも嬉し氣に、

(母)正男さん。お前の好きな兵隊が、此度の大演習でね。此市へ澤山に來た相だから、些と外へ行つて遊んで來でなさい。今晩はお前の好な御馳走をしませうね。」

(正)阿母さん、僕は最う少し勉強します。」

(母)否。今朝から膽斗お爲だから、最うお止し。」

能く學べ能く遊べ、正男さんは爾うだと、大喜びで家を出ましたのです。直ちやんは勿論一緒で。

實に今日は佳いお天氣でムいます。少年世界を抱へて犬のジヨンを引張て、正男さんは何行へ出掛けましたらう。あの唱ふ軍歌の勇ましい事。

阿母さんは覺えず微笑むだ。

(下)

正男さんが商會朋輩の明石利吉と云ふ子は、同年ですが、至極强情で狡猾で、誠に亂暴者で箸にも棒にもかゝらなかつた。

尤も利吉の父親は繼しい仲で、勉强盛りを學校へも遣らず、奉公に出しちやつたのです。家は可なり富裕で有つたから、充分の小使錢を貰ふのですが、奈何云ふものか利吉は執拗て、正しい了簡を持つて居りませぬでした。

却說商會で正男さんが、毎朝掃除する受持は、何處かと申しまするると、社長ヒユース氏の間室でムいました。

ヒユース氏の間室は十疊敷有餘で、中央に一脚の机を置き、其上には立派な墨汁壺やペン軸、其れから種種の大部の書類が載せて有ります。

巨大な金庫に數多い額、日本の古器物も有つて、常に珍重せられる九谷燒の綺麗な花瓶には、香氣の高い薔薇の花が活けて有るなど、都て主人の床しさが忍ば

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れます。

正男さんの朝の仕事は、此間室を整理するので、今日も其れを濟ましたものですから、例の使丁間室へ行きますと、軈て腕白者の初郎さんも、柔順しい一之助さんも、滑稽者の藤七さんも、彼の利吉もやつて來ました。

まだ暫時の時間も有るものですから、正男さんは好きな暑中大探檢を讀みます。『二十七』手で漕ぐ筏、水を呑む洞――の勇壯なのに、小さい肩を聳えさして。

初郎つて子の腕白には仕方が有りませぬ。最う壁の處へ足を凭らしちやあ、鯱鉾立の稽古をして居るのです。ドサンドサンと高い地響をさしては。

利吉は厭がる一之助の手を引張つて、

『俺は常陸山だ。お前は幕下の弱虫だ。サア口惜しいと思つたら、一番取つて勝負を付けやう。』

など丶挑んで居ります。

此方の傍では藤七さんが、箒を逆手に振り廻して、武藏坊辨慶だなんて、相變らず戯けて居ります。

此間室は此様な鹽梅式で、毎朝賑はしかつた。

正男さんが本を止めて、冷たい手先を火鉢に翳しながら、

『ヲウ冷つこい。手が宛然氷の様だ。』

と呟きますと、何だか皆申し合せた様に、藤七は箒を投り出し、初郎は着物の塵を拂ひ、利吉も一之助も取組合をお廢しにして

(皆)最う火が出來たかい。』

と斗り、グルリと輪に作る。其れから戰爭の談話が始まり、探檢の談話、旅行の談話と、海に山に各自が、面白かつたこと、悲しかつたことなど、感興湧くが如しとでも云はうか、却々鳥渡々々盡きそうにも見えませぬ。

就中正男さんの戰爭談は、最も熱心で最も勇ましかつたので、皆も一生懸命になつて聴いたのでしたが、果は正男さん自身出掛けて行つて、征伐するとのことに一同も腕を鳴らして、其時はと躍り上つた位でした。

途端に閾が開いた。

正男さんも乘地になつた初郎さんも、驚いて口を噤

んで了ひました。
覗るとそれは番頭の高木といふ人でした。一同お辭儀をすると、嚴そかに、
(高)皆々鳥渡訊ねる件が有るから、直此方へ。」
高木が導いたのは、主人ヒユース氏が間室で、其處には丈の高い肥つた、如何にも蹴格な主人が、髯をひねり乍ら、平常の温しい眼とは違つていとも險しい瞳を、此等子供の上に注いで立つて居りました。
高木は昵と一同の擧動を見ながら、
(高)今朝主人が室へ入ると、卓子掛が此様になつて居たんだが………。」
五人の眼は等しく机の上――あゝら無慙、瑕一つ汚點一つなき毛氈の緑色は、墨汁の紅色を浴びて醜き綾。只今刷毛を掛けて塵を清めて、而して間室を出た斗りだのにと、第一正男さんが肝を消したのであつた。
ヒユース氏は穏やかに、
(ヒ)是れ、誰れしました。」
高木は語を次いで、
(高)明石、お前ぢやないか。」
(利)私、少しも知りませぬ。」
(高)其れなら小宮(初郎の苗字)か、お前に些と惡戯が過ぎるぞ。」
(初)否、今日のは眞箇に存知ませぬ。第一今朝から一度も此間室へ入りませぬもの。」
(高)爾うか。大丈夫今津(一之助の苗字)も、壺山も(藤七の苗字)大和も知らんのだから………隱したがつて不可能。最もお前達の中より他に、此室へ入る者が無いんだから。サ、早く言つた方が宜い。何も仕出來したこを以前の通りに返せと云ふんぢやないんだから………。」
皆默つて了つて、誰一人名乘つて出るものが有りませぬ。すると誰が云つたのか、此間室の受持の大和であるといふことが、高木の耳へ入つたのでした。
(高)大和、お前が毎朝掃除をするのか。」
(正)唯――。」
(高)お前が墨汁壺を轉倒へしたのと違ふか。」

ヒュース氏の眼は、愈々險しくなつて來まして、

(と)誰れも知るもの有りませぬか。誰れも有りませぬか………日本子供、日本子供………眞箇、日本子供………。」

と斗り、不正直と云ふ言葉に訥ると、突如、

(正)全く僕が爲たのです。」

正男さんが殘念相な面持で進んだので有りました。

誰か知らぬが不正直なものも有つた者よ。自分は全く知らないのだ。けれども、只一人の爲めに、日本の子供全體に係はるとは、聽き捨てにならない。西洋人に、日本の子供は不正直だなんて認められたなら、此上も無い恥辱ぢやないか。自分は全く知らないのだ。正直に勉强をしろとは、お母さんが常に被仰る敎訓だ誰が忘却るものか。眞實自分が爲たならば、此樣に躊躇するものか、馳け付けても名乘つて出る。自分は全然知らなかつたのだ。併し悉う云ふ事なら。自分一人幾何の責を負つても構はない。喜んで制裁を受けやう何と楽しい罪科では有るまいか。——

と正男さんは生々しい眼ざして、ヒュース氏を仰ぎました。

(と)ヲウ、お前爲たか。宜しい。心配するない。」

と只——。

初郎さんも藤七さんも一之助さんも、初めて愁の眉を開いたが、利吉のみは涙を拂つた。

其後犬と猿の樣だつた大和正男と、明石利吉とは無二の親友と成りました。

彼の過ちを犯したもの丶無いとはない筈。ヒュース氏に對して不正直だつた利吉は、正男さんに對して正直に、自分がペンを盜まうとして、袂で墨汁壺を拂ひ倒したとを、落ち無く物語つたのでした。斯くして利吉は西洋人に正直に、日本人に正直な、天晴人となりました。

正男さんは、利吉の罪を引受けた位の些細の事は、疾に忘却て了つて、只お父さんは忠義を盡して死んだのに、自分は何も出來ないと、子供乍らもそれ斗りを悔んで居つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自然が與ふる

春の摘草

久田二葉

春の彌生の曙に、四方の山邊を見渡せば、花盛りかも白雲の、かゝらぬ峯こそなかりける時、麗かな日光を浴び、小道を辿り行き、なまめかしく、うなだれがちなる菫、折りふし飛び行く胡蝶の羽風に、散りこぼるゝ薫香を踏みつゝ、摘草に餘念なき令孃達。頭にかざせるリボンに蝶を呼んで去り敢えざらしめ、手に提げたる小籠に盛りて、花や若草を微笑ませたる振分髪の、どんなに樂しからう。どんなに愉快であらう。

殊に此の時、眺めのよい丘に登り、所謂千里鶯鳴いて緑江に映ずる景色を双眼に容れ、新しき若草のしとねの上に座を占め、花籠には絹傘で日蓋をして、さて紫包みの重詰めを開き、母君が心づくしの口取りを賞すれば如何に……………樂しからずや春の摘草。

今の我が邦で摘草と云へば、小女の娯樂に過ぎぬやうに聞こゆるが、我が輩は今後の新家庭に向つて、上流社會の中流社會の下等社會のと云ふ「人」のこしらへた娑婆の階級などを顧みずに、一般の摘草を盛んにせられんことを望むものである。一晩の芝居や寄席で憂欝晴しをするもワルいとは云はぬが、それに費やす「時」は別にあるので、何も自然が特に我々に與へた希望多き春を撰ぶ必要はない。最も一家擧ッてつみ草に出かける譯けにも行くまいから、大きな家庭では二隊位に分けて、うらゝかな日に胡蝶と一つしよに浮れ出すがよからう。しかし時間に餘裕のない爲めつみ草なんぞはと二の足を踏みなさる方も御座いましやうが、そこは算用と工夫で、どうかなりましやう。他のことゝは違ッて、健康を得、愉快を得、新しい教訓と希望を得るべく、樂園に遊び自然の女神に接するのですもの…………。

しかしコンナ問題になると、勢ひ余輩は自然を代表して泣かねばならぬのである、自然が人類に向ッて平等に忠なるのに(天災に就いては別に説あり)、人類自身が不知不識の間にワザと、地球を分割し、其の又狹

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い上に、人類の進歩を妨げる階級制度とか云ふものをこしらへ、連日醉ふてあそこの花こゝの花と見あるき、習慣や風俗を害し自然美を蹂躪するものを製造するかと思へば、一方には一家樂しく、人靜かなる野遊のつみ草さへする『時』を與へぬやうな悲慘な境遇をこしらへて居る。人類進歩の上から見るも、社會改良の基たる家庭の上から見るも、自然の女神の目から見るも浩嘆の至りである。で、余輩も自然を代表し、玆に於て階級制度の打破、帝國主義とか云ふもの丶絶滅を絶叫するのである。そうして人殺し捧を持つて『人は萬物の靈長』などと力む間に、衣食以外、別に人らしい競爭をしてほしいのである。話しはソレたが、之れもゆきかゝり上、此所で一言せざるを得なかつたのである。

さて『春の野に出て若菜摘む……』などは昔しの書物にタント出て居るが、つみ草をすると云ふことは、我が淺見遂に見當らぬのである。で、考ふるに、昔は若菜摘に出たのを、今世になッて、つみ草と譯したのか。或はそうでなくて近年になッて、西洋からつみ草の清い風習が入ッたのか。又は此の風が自然に我が近世になつて生れたかと云ふ三つの中のどれかに歸着するだらうと思ふ。

で、余輩の呉れ〲も望むのは、日本在來の『花より團子』とか『酒なくてナンの己れが櫻哉』と云ふ卑しい思想を根底から拔いて、花あッて始めて酒も團子も其の味を賞するに足る事を自覺してもらひたいのである。さらば、一日半時の摘草が如何に家庭を健全にし、如何に自然物に對する疑問を氷解して智に滿足を與へ、美に對する鑑賞を高からしめ、且つは自然の敎ふる大理法を感受させることの、計られぬを證するに足るであらう。

摘草の栞 （食用の草）

朗かなる春の日に、笑ふて提籠の中へ入るべき、つみ草は、前號に說いた春の七草、及び左の數種の植物である。

△ミミナグサ（耳巻）路の傍や園圃に自生し茎にも葉にも細毛のある石竹科の草。

△ワレモカウ（地楡）葉は羽状複葉、花は穂状に列び、蕚は四列で花ビラは無く、薬用にもなる薔薇科の植物。

△ヤハズサウ（鶏眼草）ヤハズハギとも云ふ、花梗の短い紫色がかつた色の花を咲く、卵形の葉を持つて居る荳科の植物。

△リヤウブ……白い花を咲く令法科の草。

△ヨメナ（鶏児腸）秋、白紫の美しい花を咲く菊科の植物で、葉を食川される香のよいもの。

△カワラケツメイ……子ムチャ又はコーボチヤなどと云つて美濃、九州の一部には栽培するとか、秋になると可愛らしい黄花を開く荳科の草で、葉を乾かして茶の代用にする。

△タンポポ（蒲公英）クヂナとも云つて、おなじみの菊科の草。若葉を食用にされるし花は奇麗で、其の害なき黄金（花の色）な地上に蔓延させるに甚だ勢力のある愛の子である。

△ツクシ（土筆一名杉菜）ツクツクシと云つて、之れも御存じの草であるが生い立ちが他の植物と異つて居る。いづれ面白いところをチヨツクラ話ろかもしれん。

右の他食用にされる物や花を咲くものはいろ〳〵あるが一般に無いものや、自生せぬものなどだから、此の位にして切り上げる。要するに摘草は、畳の上では面白くない。

再び春の七草に就て

春の七草に就て前號に少しばかり語りましたが、其の後アレに就て新しい見聞や異ッた説も得たので、茲に掲げて家庭理科の參考に供します。

◎佛座をオバコだと云ふ人がある。又、貝原篤信は單にカワラケなど云ふもの也と云ひ、安東伊三郎氏はツクツクシだと云ッて居る。

◎安東氏は又、タビラコとはハコベのこと也と云ッて居るが、これは別物であることは云ふ迄もない。

◎七草粥を煮る時、静岡地方ではコンナ歌をウナるそうである。

七草なづな、唐土の鳥が亘らぬ先に、
ストトン、トンヤレなー。

◎これは車鬼鳥と云ふワルイ鳥が居るから之を追ひ拂ふ爲めと云ふ迷信から起ッたのである。と『家事通信』が云ッて居た。又此の事は定家卿の『桐火桶』など云ふ歌書にもあるそうだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◎御形を余はヨモギだと云ッたが、前田曙山氏は『春の七草の御形又五行なるものは、即ち鼠麹草にして、和名ハハコグサと云ふもの也』と云ッて居られる。しかし「生物界の現象」なる書には、餘と同じくヨモギとしてある。來年の春迄に確なことを調べたいものだ決して鬼に笑はせぬ。讀者諸君も御説あらば聞かして下さい。

*　*　*　*　*　*　*　*　*　*

われ〳〵は自然が與ふる春を、多趣味にして希望多き家庭の笑ひの中に送らねばならぬ。（完）

△日々に生れかはる。。。。。。。。　昨日の我は今日の我にはあらず、昨日の我は昨日死したり、今日の我は新しき我、天地と共に生れ、天地と共に進み行く、我は不老、我は不死、希望あり、光あり。。。。。

△社會の戰塲　新しき我は新しき裝、軍馬は嘶き、喇叭は鳴りぬ、人世の活路、社會の戰塲進め進め進んで戰へ戰つて死せ、勇ましく戰はざれば勇ましく死せず、勇ましく死せざれば勇ましく生れず、あゝ我は社會の勇士、天地の大功者！

（南浩生）

鰐魚奇談

鰐魚と云ふ海獸は陰險兇惡で馴致し難いものとのみ世人に思はれて居る。成程其二點のぎら〳〵する眼や陰顯出沒不意に人を襲擊してひきずり込む事などは、よく書物にも出て居つて、氣の知れぬ險惡な動物には違ひないが、腦味噌の足らぬ動物丈に方法一つで人間の心のまゝに之を遣ふ事も從つて容易である。

玆にバアチレット氏と云ふ人があつて、此世間の人の嫌らう鰐魚の事に趣味を感じ、之を研究し、之と遊び、之に時々金錢を費し、又之を馴致する事を樂んで居つた。此人の履歷話は頗る面白い。

バアチレット氏は初め樂しみに鰐魚の研究をやり出したので、之をもうけ仕事にしよう抔と云ふ考へは毛頭なかつた。其頃丁度或有名な見世物場の興師が二人何か珍らしいものを買ひ出す爲に、大陸を旅行して居つたが、不圖バアチレット氏と其氣に入りの動物の話しをちらと聞き、直接に見たいと云ふ事になつた。そ

れはよかつたが、一體其人は何所に住んで居るのかよくはからず、探し出すに餘程骨が折れた。しかし流石は商賣柄で、二三日經つと嗅ぎつけ、氏を訪づれて其鰐魚のつかい方を見て感心した。そこで早速一ケ月三千圓の大金を出すが、佛蘭西の首府で公衆の前で之をやつてくれぬかとかけ合つた。パアチレツト氏のおどろきはどんなであつたらう。そんな商賣氣は少しもなかつたので。が、其色を顏にも見せず兎に角妻君に相談して其賛成を得てからと答へた。處が結局妻君も同意したと見えて、佛蘭西の首府に鰐魚を連れ出した處忽ちにして大評判となり各國からこちらに〳〵と云ふ有樣で引張凧になつた。遂にロンドンの興行師も買出して英國人にも紹介され、大變な人氣を得た。

勿論此以前にも色々鰐魚遣ひの興行はあつたが、パアチレツト氏のやり方に比ぶれば幼稚なもので、只をもに舞臺を徊はせておいて、鰐魚遣ひが好な音をさせると、食ひ物をもらいに元の籠に還つてくる丈であつたので。

他の鰐魚遣ひと違つて、パアチレツト氏は第一自分で鰐魚を捕へてくる。商賣人から買入れるのではない。其鰐魚の數が不足して來ると、其捕へ者を募りに自身で亞弗利加又は亞米利加に出掛ける。其捕獲法は極めて單純なもので、土人の案內者をやとうて河の堤を歩いて行く。すると鰐魚が朽木の樣に横はつて一睡りを裝ひ、餌の來るのを待つて居るのに出くはす。最初パアチレツト氏は丈夫な網を作つて之で捕獲する積りであつたが、鰐魚が其網をずた〳〵に破裂つてしまう事が多く、或は又一生懸命に逃げやうと思ふて、傷を負ひ、死に瀕する事も多いから、此法は好結果でなかつた。次に係蹄（Lasso）を用ひて見たが、こいつも駄目であつた。それは鰐魚が七轉八倒大もがきをやつたので首の廻りに纏ひ付いた繩が大變かたく〆付けられ、之を解く事が出來ぬやうになる。其結果繩も係蹄も其れきりになつてしまう。で、彼は最後に一法を思ひ付いた。それは極めて單純な方法だがしかしなか〳〵うまく考へたものである。

一體鰐魚の固着性は人の知つて居る通りで、一度何物にでも嚙み付いたら決して放さぬものだ。そこで氏の法は繩のさきに木の片れを付けて之で釣るやりかたで、鰐魚先生何の氣なしに、其木片に嚙み付くと、こちらは次第〱に陸に引づつて、徐ろに長方形の箱に誘ふて來る。そして其箱の中に其頭を入れる、箱は行ぬけで兩端を閉ぢて其儘船に積込んでも差支ない樣に箱詰にされるのだ。船客は其荷物の何物なるかを知る人は少ないが、或時其船が動搖した爲に、見事に生長した鰐魚の入つて居る箱が毀れて船客一同大恐慌、パーチレット氏はさん〲油をとられた事がある。今一つは頗る面白い話で、新荷を持つての還りの事、船から上がつて馬車をやとつたが、馬車ががた〱行進するに從ふて、箱の針が次第に弛んで來た。馭者は荷物の何物なるかは少しも知らないから、平氣でをい〱とやつて居つた。すると、突然大きな尾が鼻先に顯はれ、續ひて馬車が二三度ゆれると共に、道の眞ん中に鰐魚がころがり出たので、馭者は氣絶せん計りのおどろき、其近邊に居た人々は絶叫して命から〲右往左往、一時筆紙に盡し難き程の光景を呈した。パアチレット氏は之を見て馬車よりとび下り、其恐ろしき動物を靜かに取上げて元の箱に納めた。然し何時でもこううまく行くと云ふ譯ではない。其證據には氏の右の手は指が一本不足して居るが、之は嘗て猛惡の鰐魚を馴して居つた時にやられたのだと云ふ。

世人に嫌はれる其動物も、天性好きな氏には非常に可愛がられて、氏は其氣味の惡ひやつを奇麗な奴がとか、小僧がとか云ふ樣な口調で話して居る。鰐魚の體温は常に外氣より低いから、何物にでも其體がさわるのが大變心持がゐゝらしい。最も氣味の惡いのは其食物で、大概の人は胸を惡くしていやな氣持になる。腐敗した肉や、味のかわつて居る乾酪だとか、鼻持のならぬものを舌打をして喰て居る。

鰐魚が腦髓を持つて居るかどうだかは疑問に屬するが、若し持つて居るとすれば、殆んど分らない程少さなものだ。兎に角總ての動物中で、一番理會力のないも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のに違ひない。然れはバーチレット氏が此小僧を斯迄物の分る様に馴養した熱心はまヽに感歎の外はない。

鰐魚が物にかみ付いたら、はなさぬと云ふ事は前にも述べたが、氏は時々此れを利用し、肩掛を前に差出す。すると、鰐魚は按の定一生懸命に之に喰ひ付くから、其儘そをつと肩にしよつて其不格好な荷物を背にぶらさげながら歩いて行く事もある。

鰐魚を新に捕獲した節は、空氣もなく食物もなく、數日間閉ぢ込めてをき、もうよかろうと思ふ頃になれば不意に大きな水槽の中に投り込む。其水槽は豫め日に晒して微温の加減にしてあつて、數多の鰐魚が一所にかこうてある所。しかし新参先生はきつと一度は鬱忿晴らしに氏を襲撃するのが常であるが、そこは馴れたもので、それに應ずる手段をする。尤も此怒つて居るやつをいじめる樣な事は決してせぬが、天性之がすきなせいか、又は此人丈に一種の動物電氣が備はつて居るのか、非常に猛惡な鰐魚も暫時にして幸福な家庭の一員になつてしまう。

バーチレット氏の見世物で、頗る面白いのは其餌をやる時である。元來鰐魚の齒は妙に出來て居て、咀嚼するのが出來ないから從て食物を一呑にしかねる。大きな食物をくわへた時、假令は牛の頭を水槽の中に投入れヽば、ある鰐魚が之をくわへる。併し之を呑込事は六かしい一生懸命に持つて居ると、他のやつがやつて來て一方の端をくわへる、そうして二疋でころがりまわると、何しろひどい齒だから、其内に塊がいヽかげんにづだ〳〵に裂れて呑込める樣になるのである。

氏の話しに、抑鰐魚を捕獲するには、餘程の費用がかヽる上に、捕へて來ても違つた土地の氣候に馴らすのは一通りの骨折ではない。從つて手馴れた鰐魚に死なれるのは、非常につらいそうで、氏は常に怠らず注意して、何事も自分で世話をし、餌をやるにも一度に餘計にはやらない。鰐魚の飼てある水槽を掃除する事にも人手には任せないと云ふ風。で、彼等がかく異國の風土に耐える事の出來るのは、細かい所まで自分が手を下して注意してやるからの事であると。さもあるべし。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

子なり夫なる貧き兵士に寄す

國難終に爆裂致し、何とも不本意な次第であります。此際現役兵たるの人は勿論、豫備後備の籍にある人々から無經驗な補充兵に至る迄、動員令に應じて、おの／＼戀しい家庭を打捨て、最早既に異域に行かれたのもあらうし、日ならず行くので其武裝に忙がしいのも御座いませう。私はこゝに不圖氣付いたのは貧しい家の主人、若くば悴たる人の氣の毒さです。尤も、不斷であれば、何とかなるべきを、此樣な時節となれば何事を犧牲に供してゝ出征を望み、情を殺して勇しい首途を見せる事で誰でも名譽とし、又現在の道德に適つた事ともなつて居る譯ですから、どうも致し方がないのであります。それ故十中八九迄は涙を飲んで、その貧しい兵士をも送らねばなりませんが、實に思へば思ふ程氣の毒で仕樣がない。後に殘つた家内はどうして暮しませう。老いたる父母の明日は如何若き妻の明日は如何。誠に悲慘な運命です。

私は此際到底駄目の事とは信じまするが、我日本國は固より仁義の國ですから、或は哀願次第でどんな結果にならぬとも限りません。その心から、私は左に私の軍隊生活中の經驗やら感じた事、それから思はぬ出來事などを一々筆記して、赤貧なる兵士の御參考迄に一覽に供します。

私は志願兵の特典を以て、過る年、某地の兵營に於て、一年間服役しました者で、僅かながら、營内の事は實際に見聞しました。私も、入隊しまして、他の三

年服役の方と一しよに、或る中隊に編入せらるゝことゝなりましたから、彼の十二月の寒空に朝は靴磨きで、兩手の指の先きは切るゝかと思ふた事もあり、夜は一斑の新古兵と共に、十五六名の者、或は書狀を認め、或は裁縫或は讀書、或は銃器の手入等に一本の蠟燭の暗きを歎じた事もあります。最初の一二ケ月は、日每の業務に馴れないのと、火の氣の少い爲の寒とで、新兵の内の弱虫は逃亡する者もある。併し實際、以前勞働を以て糊口して居た方は、軍隊に於ては一日中の勞働は少し、食事も一日一度は、兎に角肉類があるので、實は身體は樂な譯である。唯所謂、諸事に規律が立つて居るので、自分の身體も命令によつて、動かされなければならないと云ふ事が、大に究屈なのである。私なども隨分土砂などの代用に用ゐられた事もあり。つまらないと思ふ事に、一日も二日も、無益に時間を費した事などありて、兵營と監獄とは幾許の相違あるかしらと、考へ込んでは私かに寢臺の上に半夜を眠らすに過した事もありました。如何にあせつても、身は

喇叭の音にて、起臥せざるを得ない境遇に在るのである。鄕に入りては鄕に從へとは主義を曲げよと云ふ事に解釋せざれば、決して應用して惡くはあるまいと思ふ。即ち人は、總ての境遇に、身を處する覺悟をする事も、必用であらうと思ふ。軍隊に在つては、總て上官には、命唯是に從つて居ればよいので、少しく書生肌の、殊に權利義務などの事を嚙つた方は、いきなり鼻柱を折られるので、之にこりず、反抗すればする程、益々いぢ惡く逆待される樣になるのである。此逆待を根に持つて進むと、三年間否軍隊生活は全く地獄の樣に考へて來て、不平不滿で暮らさなければならぬ。現に或る地で學識ある人が志願兵として入隊し、上記の如き有樣に立至り、漸く一年は卆ましたが、其爲めに除隊後、精神に異常を起し、遂に自殺したと云ふ話を聞きました。だから日本の內閣の改造されざる內は、現行法令の改正されざる內は、戰爭も止むを得ざる時の一手段として公認せらるゝ間は、否な、日本人が其根本の思想に於て、一般に現今より一段進步せざる間は、日本の壯丁の幾分の一かは、徵兵制度の存するにより、公役に服せざるを得ないのである。それで是非なく引出された時には、國法を破るか、然らざれば服從にあるのである。此服從に一つの美がある、又規律と云ふものは如何なる程度迄世の中に行はれ得べきか、又吾人の肉體は如何なる程度迄强健ならしむることを得るか、從つて身體と精神との關係は如何など種々の問題を捕へ來りて、之を軍隊內に於て解釋するときは、中々趣味のあるものであらうと考へる。肉體各部の作用を十分發揮することの出來る樣に練習して置くのは必用な事で、野宿したり山川を跋涉することは、軍隊に於てのみ必用と云ふのではない。學術技藝を練磨する時も必用である。亞弗利加を橫斷せんとせば、地球の極地を探究せんとせば、ヒマラヤ山を攀ぢんとせば、吾人は如何なる用意を爲すべきか。小にしては一分隊の各個大にしては步騎砲工互に連絡を斷たず、且つ共同の動作に出でざれば、戰利を納め難しとす。何ぞ社會組織に似たること多きや。軍隊に在つても軍

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

隊以外の事を研究し得らるゝなり。一時の憤怒の爲めに、一生を誤るの愚を學ぶべからざるなり。殊に下級上官の一般に頑迷なるは何れの軍隊に於ても異る所なしと云ふ。

斯くて四つき五ヵ月となれば、氣候も善くなる、仕事も一通りは呑込んで、横着をさへしなければ、間違の爲めに打ちこらさるゝことはない。六月になると、先づ一人前の兵士になつたと云ふ譯で、日曜日の外に、水曜日の午後も用辨のために、外出を許さるゝことゝなるので、此時の嬉さと云ふものは、全く鳥にして見たらば、羽翼成つたと云ふ時にても、たとへたらよからうか、私の鈍筆では言ひ顯はす事の不十分なのを恐る。

丁度此時期であつたと思つたが、中隊の一人の戰友(範圍に應じて兵士は互に戰友と呼ぶ)に除隊せらるゝ者あり、而も去る十二月に共に地方(隊内にありては軍隊以外を呼ぶに地方と云ふ、其郡鄙を問はざるなり)より來りし者なり。時ならぬ時に除隊せらるゝ者は、平時にありては疾病によりて免除せらるゝ者、犯罪者などの償勤濟(犯罪者は刑期中の時日を通常服役年限の外に償勤せしめらるゝなり)の者等である。然るに、今自分の聞いた兵士は、其等には該當しない。さてどうした譯だろ? 殊に學校も、高等科の二年位迄はすまし、勤勉の方であつたから、其隊内では上等兵候補者(三本筋になるのも唯年功ではいけない)に撰まれたのだ。して見ると、三年服役者の中では立派な方である、其人が或る日除隊となり、自分も中隊の皆の者と、一しよに營門の所迄見送つての歸るさに、中隊附の曹長殿に、其譯を聞いたのである。すると其答は次の如くであつた『あの兵ですか、あれは非常に家族が困難をして居るので、全く從來あの男の手一つで、五人とかの糊口をして居つたが、丁度當鬮になつたので、詮方なく之を見捨てゝ、出て來たのである。家族は其日から口が干上るので、一時は親族の者、又村内四隣の者も、之を扶助したがなか／＼二年三年とは續かないので、親族及四隣の證認、村長の保證、郡長の奥印を貰ふた歎願書を、家族より縣廳を經て、師團長に差出した

のである。師團では尚一應聯隊區、村役場等を通じて身元を調べ、其願書の正當なることを確めて、所謂歸休兵と同格に取扱ふことを此聯隊に許可したのである。故に兵役免除にあらず、又入隊の日より三年間は豫備役にもならず、現役兵であるとの事である。併し全く豫備役と同樣に取扱はれる筈である』と云ふことだ、尚斯くの如き例は千に一二位のもので許可せらるゝ者甚だ僅かである』と曹長は云ひました。はゝあ、なる程、わかりました、そうですか、彼及び彼の家族は、如何に喜ぶことであらう！と云ふて、曹長と分れました。

右は私の記臆に存じて居ることを書いたのです、無論聯隊により多少總ての事に關し相違して居りますから、全く同じでないかも知らない。併し右の如きことのあつたのも事實ですから、心配のみせずに、少しく工夫をなされては如何と御勸めするのである。又其等の手續全く無効となつた時の心得にもと軍隊生活の一部分を寫したる積であるから、若し未だ隊內の樣子を知らずに恐を懷て居らるゝ方は、一讀せらるべし。(志願兵)

戰場の血

戰のない世こそ眞に望ましけれ。人が平和の酒に泥醉せず、太平の海に惑溺せず、精進力行、何時も一面の弱點を抑へて、健質なる生涯を送つて行くなれば、世の中は誠に神の國であります。

固より世界文明の事業と云ふものは、此種の平和の社會をこしらへる事に外はありません。然るに、今日迄の成蹟で見ると、其事業は形式の上ばかりで、精神上に及ぼした所は、極々微細なものである。併し、世界の人はこれを知らぬのではない。よく知つて居るのだが、實は心の一面に弱點があり、この弱點がどうしても彼をして神の心のやうに無慾ならしめない。

戰のある事は成程好ましからぬ、人生總體の憂ひである。今回の戰役は決して大快事と云ふべき理由がない。併し乍ら身を以て事に衝る所のわが軍人諸士には少しも罪がありません。惡いのは國是若くは外交などゝ云ふ利己を含んだ近世の流行語、その流行語の源と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なつた人間の慾心がそれでありませう。

余等は此際出征の軍人諸士に對して、深厚なる敬意表し、並びに其家郷に殘れる遺族の方々に向つて、同情の熱涙を濺くに吝ならぬ者であります。笑顏を以て氣丈なる妻に送られ、萬歳の聲に埋められて征途に登つた彼等、半夜假に夢さむれば異域の客！星は天の一方に淡く、鵂悲鳴を上げて陣營を過ぐ。情あるもの誰か深き思ひに沈まざるを得ませうや。『あゝこれ人生乎。』然り、これが人間の形造る人生てふものゝ運命である。神は君に天壽を保たしめる事を廢して、空しく戰場の塵となるべき運命を與へた。併し乍ら、君は決して神を呪ふてはならぬ。神の心は最初から美しい。自我心を滅せよと叫んで居るのです。而して其絶叫を耳にし乍ら、人間は常に獸的の慾念に驅られ勝ちで、神の心を容易に掬まうとはせぬ。

人間が血を流すべき時機が來たのは、神の怒りに觸れた時であります。君は丁度その犧牲となつた一人、人類の側から見れば實に尊むべき一人であるが、神の目からは必ずしてもさうではない。

人一人の企ては人類のすべてはこれに連帶の責を負ふべき故、今回の出來事も責任は一國にあるのでない、各國にあるのです。人類總體にあるのです。

あゝ併し乍ら、余等もまた其一人で、此際君に對して體裁のよい事を云ふべき權利は少しも持ちませぬ。只一言最后に云ひたきは實際修羅場に臨まれた場合の君が覺悟わが日本國の人民としては飽く迄忠勇に、飽く迄剛邁に進退すべきは勿論であるが、其餘りに『わが國家』てふ熱にばかり驅られて、肝腎の大意味を忘れてはならぬ。君等も亦敵對も共に血を以て人類の罪惡を償ひつゝあるのである。若し神の怒にして強ければ、君等の同胞を血をことごとく要償する時があるかも知らない。其時には余も家を捨て、戰ひの野に赴き、その正しき聖旨に應じて、一人前の責務を盡す覺悟である。

新婚の姪に與ふる書

枯川

（其二）夫に對する心得

昔の女大學に曰く『婦人は別に主君なし、夫を主人と思ひ敬ひ愼みて事ふべし』又曰く『女は夫を以て天とす、返す〴〵も夫に逆ひて天の罰を受くべからず』今日の若き男女の中には、此の女大學の文句を知る者は殆んど無いであらう。然しながら此の女大學の思想は深く人心の底に潜んで、まだ中々消えて居らぬ。現に新聞紙などにも「所天」と書いて「をつと」と讀ませて居るのが多い。總べての男女は知らず〴〵の中に此思想を養はれて居る。卿と雖も亦必ず其感化を受けて居るに違ひない。

そこで予は第一に卿に勸告する。先づ此の古き思想を棄てよ。夫は主人でも無く、天でも無い。女は夫に事へる者では無い。女は男と夫婦になつて相共に生活するのである。只相共に生活するのである。此の「相共に」の一語を忘れてはならぬ。

扨生活は何の事であるか。云ふ迄もなく生きて行く事である。生きて行くには食物が入る。衣服が入る。家屋が入る。此衣食住を十分に得て行かうとするには、到底一人の力では及ばぬ。そこで人が大勢集つて村を作り、町を作り、國を作つた。即ち人は社會を作つた。そして或者は食物を作り、或者は衣服を作り、或者は家屋を作つた。即ち社會の中に農夫、機織、大工などの分業が出來た。其後分業が愈々盛になつて、種々雜多の職業が出來て、斯くて世は終に今日の如き有樣に進歩して來たのである。故に、今日の社會では、生活はモウ決して一人々々の生活では無く、社會全體の共同生活である。故に、我々が此社會に生活するのは、我々自身の爲に生活するのでは無く、社會全體の爲に生活するのである。故に、我々は此社會に生活して、自身の事ばかり考へてはならぬ。常に人の爲、社會の爲を考へねばならぬ。少しでも人の爲になる樣に働き、少しでも社會の爲になる樣に働くのが、人たる者の第

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一の心得である。故に生活とは先づ生きて行く事であるが、生きて行くと同時に、此社會の爲に何か善き働きをする事である。

生活の意味は是れで大方分つたであらう。されば男女は夫婦となつて、相共に衣食住を計ると同時に、相共に何か善き働きを爲さねばならぬ。

そこで善き働きとは何ぞや。今少し是れを説明して置かねばならぬ。人の爲、世の爲に盡すのが即ち善き働きではあるが、然らば人の爲、世の爲に盡すには如何なる事を爲すのであるか。曰く、己れの性質と才能とに適したる仕事を正直に善く勉强するのが、即ちおのづから人の爲、世の爲になるのである、自分の性質と才能とに適せぬ仕事をするのは、自分の爲にも損、世の中の爲にも損である。又如何に自分に適した事でも、それを不正直に行ふ時は必ず人の不爲となり、世の不爲となる、故に、自分に適した事を正直に勉めて居れば、何も必ずしも人の爲、世の爲と考へずとも、おのづからそれが善き働きとなるのである。

扨、此に於て「相共に」の一語を説明せねばならぬ。夫婦が相共に生活すると云つた所で、何も夫婦が同じ事をすると云ふ意味では無い。社會の共同生活が分業に依つて出來て居る如く、夫婦の生活も亦分業に依るのである。男は男の職分を盡し、女は女の職分を盡し、男女一對一體となつて善き働きをするのが即ち夫婦である。故に「相共に」とは分業を以て相助け相合する事である。

斯く考へて見る時には、世の中に種々雜多の職業はあるが、それは只互の分業であつて、何もそれが爲に貴賤尊卑のある譯は無い。男女の間もそれに同じく、男女身心の差別はあるが、それは只分業であつて、何もそれが爲に貴賤尊卑のある譯は無い。

故に予は第一に卿に勸告する。卿は先づ古き女大學流の「夫に事へる」と云ふ思想を棄てゝ、「夫婦相共に生活する」と云ふ新しき考へを持たねばならぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦人界の活動

平等、博愛、固より敵と味方の差別はない。國の爲に血を流した負傷兵を、慰藉し介抱するには、是非共婦人のやはらかき纎手の力を借りねばならぬ。余は次の新報を讀んで、大に意を强うした。行け、我日東國のナイチンゲール諸姉。

△看護婦出發　出帥と共に今度出發すべき看護婦中左の二十二名は博愛丸に乘組たり。

周防チヤウ、稻田ユキ、村瀨トク、山崎キク、秋元ミチ、渡邊ヨシ、石川シゲ、由良タキ、田中タ子、高木ウメ、館ケイ、香川ミドリ、大橋ユウ、齊井テツ、堀井タカ、小原竹世、玉木江世、玉木エイ、芝崎ハル小串リヨウ、加藤イソ、原ヒテ

又弘濟丸に乘組たるは左の十九名なり。

野崎シキ、在田ノブ、高田ヤチ、山口ハツ、菊地セイ、奥野ムメ、池田チエ、井出タツ、栗原キン、太田ヨシ、武市キク、花園ヒデ、加藤ジン田中ユキ、遠藤ナエ、森田コト、秋山トミ、須澤アイ、宇原チサト

我國が露國と戰を搆ふると同時に、米國陸軍看護婦附監督ドクトルマギー女史は逸早くわが高平公使に一書を寄せ、戰地の看護婦として一先づ本邦に渡來せん事を申出した。無論女史は一團の同國婦人を引率して來るのであるが其勇氣と精神とは我婦人界の容易に模し能はざる所。余等は滿腔の敬意を以て彼等一同を迎へるに躊躇せぬ。只簪を賣つて義捐金を作つたと云ふので、それで婦人の義務が濟んだと思ふのは大きな誤解。

戰爭の半面

其日暮しの家にあつて、肝腎の稼手を兵に徵せられ、終に其遺族が路頭に迷はねばならぬと云ふのは、何等慘鼻の極であらう。此際我國民は分に應じて彼等の救護に心を向けねばならぬ。富みたる人にはこれを以て一つの事業とする程の覺悟がいる。單に家庭と云ふものを立脚地として愁訴すれば、戰爭は實に家庭の仇敵である。今新聞雜報の一二を左に揭ぐ。

△憐むべき家族　出征兵士の遺族には頗る憐むべきもの多かれど是は亦特に涙の催さるゝ話なり淺草區田中町四十二番地蹄甲職篠村元太郎(六十一)は忰幸太郎(二十五)德藏(二十二)の兩人入營し三男政藏と長女つるを對手に暮し居れど自分は高齡にて何事も働き得ず生活に差支へ家賃も滯りて差配人見山新太郎より店立を申込まれ窮狀日も當てられざれば其筋にても扶助法の協議中なりと

△軍人の親　深川區東大工町廿三番地車夫淺田虎吉(三十)は去廿七八年役の當時近衛輜重現役にて渡淸し各地轉戰の後卅年に無事歸宅し父和助(六十六)母フク(六十)の二人を過す中妻カツ(二十八)を娶り長男酉太郎(八つ)次男竹次郎(三つ)の二人の子をも擧げしが和助は先頃より脚氣に罹り歩行不自由の折も折虎吉は今度後備の召集に應じて一昨日午前八時入營の身となりたれば親子妻子五人の者は稼ぎ人を失ひ早速其日の事にも差支ふる事となり云云

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

編輯記事

◎元來編輯と云ふものは六ヶ敷いもので、動もすると單調に傾き易い。本誌も丁度來號で一週年になりますから、この機を逸せず、益內容を清新に致し、材料の單調ならざらん事に心掛けます。又目下時局に對しても家庭雜誌として盡すべき事柄には最も機敏なる態度を取ります。

◎本號の卷頭以下にある二篇は、社會主義第二講演の際、其大略を聞いて筆記したものです。平民新聞にも簡單に出て居たやうですが尙ほ時勢に甚だ適切だらうと思つたので、敢てこゝに登載する事と致しました。

◎大坂兒玉花外氏より「花外詩集」を贈らる。其內の一篇は本紙に出しましたが、前后三十題、皆な夫々に作者の特色が發揮され、愛誦にたえぬものが不斷あるのです。余は作者が文材の上に餘り拘泥せず、云はんとする所を率直に平易に歌はれた作者の心情を太た愛す。

◎最近に寄贈して來た雜誌は左の通り。

『求道』一號 『佛敎婦人』四ノ二號 『通俗宗敎談』九號 『少年』五號 『社會主義』八年四號 『新人』五ノ二號 『常盤』七ノ二號 『帝國文學』十ノ二號 『成功』三ノ五號 『婦人新報』八十一號 『あろは』三號 『中學科講義錄』十五號 『削亭新聞』三十一號 『二十世記の婦人』一ノ一號 『家庭新聞』每號 『婦女新聞』每號 『佐賀家庭新聞』每號 『直言』三號 『評論の評論』七十二號

日本の臺所に科學の應用が行はれて居ないのは、大なる缺點であります。竈、薪、餘り感心しません。本號の廣告にある瓦斯竈などは、此缺を補ふに最も妙で御座いませう。

◎戰爭小說と題して實際の話を直に小說になほし續々出版したるものは郁文舍で、江見水陰氏これが監輯たり。其第一編は『動員令』。面白くして詩味のある作物が多い。(定價八錢)

社告

既に一ヶ年分を前金で御拂込みになつた方は、丁度本號を以て前金切となるので御座います。それで、本社は今改めて御依賴致しますのは、今後も矢張前同樣、深い同情を持つた熱心なる購讀者となられ、間接に此雜誌の事業の助力者となり下さる一事で御座います。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雑誌 合本 第一巻

一冊價金五十錢 郵税金八錢

巻頭には便利なる目録を添へ、製本は美麗高尚、クロースにて金文字入也。これを以て細君の文庫を飾るに宜しく、家庭問の贈答品としては更に宜し。新年の際若干を製本して、之を江湖に試みしに、思ひの外の高評を得て忽ちの内に賣切となれり。今度幸に數百冊出來したれば至急御申込ありたし

東京京橋新湊町
發行所 由分社

本誌讀者に限り當分の內壹割引にて差上ます

此清心丹は全國到る所にあり

ニツケル罐入にてポケツトに用に適す

懐中要藥 **清心丹** ニツケル罐入 定價拾五錢

本舗 東京市日本橋區元大坂町八番地 高木與兵衞製

旅行又は平常携帯に便利也

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

週刊

平民新聞

每週日曜發行

定價一部郵稅共三錢五厘、廿部前金六十五錢、五十部前金一圓六十錢、但し郵券代用一割增の事

社會主義の見地に立ち絕對的非戰論を主張し、又婦人問題に關し特殊の注意を拂ふ、編輯局は安部磯雄、西川光二郎、石川三四郎、幸德秋水、堺枯川等を以て組織す第十六號二月廿八日發行せり

平民文庫

社會主義入門

三月一日發賣

▲定價一部金十二錢 郵稅金二錢

目次

- 共同生產（西川光二郎）
- 社會主義と中等社會（堺枯川）
- 階級戰爭（堺枯川）
- 社會黨の運動（幸德秋水）
- 社會主義のイロハ（石川三四郎）
- 社會主義論（安部磯雄）

發行所 東京市麴町區有樂町三丁目 平民社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

輕便

瓦斯の煮燒

德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十六分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費最少なく德用便利也

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尚各種式新器具は當社構内陳列所又は銀座陳列所きへ陳列致覽に供居候御立寄御一覽被下度候

東京
神田
錦町

東京瓦斯株式會社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

東京神田區駿河臺鈴木町二番地（御茶水橋畔）

電話本局八八八番 一三八五番

東洋内科醫院

院長　醫學士　高田畊安

診察　毎日午前但日曜日及大祭日休業、入院診斷後隨時應需、火木土曜、窮者施診○病室增設落成

神奈川縣相州高座郡茅ヶ崎海濱（停車場所在）

南湖院

副院長　醫學得業士　林止

診察　院長出診土曜日午後、副院長診察毎日午前、但日曜日大祭日休業、入院診斷後隨時應需、土曜日午後施診

東京麴町區三番町三十番地（市ヶ谷停車場附近）

高田病院施診所

主任　醫學士　松田三彌

診察　毎日午前、但日曜大祭日休業、窮者ニ施診ノ上其病名及養生法ヲ示シ處方箋ヲ與フ○往診應需

外科皮膚病

梅毒 痔痳 外科的婦人科 尿道器械的療法

診察　午前九時より十二時まで

東京　新橋際 出雲橋　**加藤病院**

院長　獨國醫學士　加藤時次郎

分院　横濱神奈川臺。火木土午後三時至六時
小田原海岸　毎月曜午前中

帝國貯蓄銀行

銀座一丁目河岸通り（電話新橋 八一六番 二八〇八番）

飯倉四ッ辻	飯倉支店	電話新橋一五七四番
赤坂表一丁目	赤坂支店	電話新橋二〇六八番
四谷大通り	四谷支店	電話番町五一〇番
牛込神樂坂	神樂坂支店	電話番町六三〇番
本郷一丁目角	本郷支店	電話下谷七二番
神田須田町	須田町支店	電話本局二〇七三番
南國米澤町	米澤町支店	電話浪花二五九〇番
淺草吾妻橋通	吾妻橋支店	電話下谷七三番
南品川一丁目	品川支店	電話新橋一一三九番
横濱吉田町	横濱支店	電話横濱一三〇四番
日本橋坂本町	代理店 田中銀行	電話浪花

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

土木叢書發行の旨趣

近時土木工業の用益々廣きを加へ日に進み月に盛なるの槩あり、然り而して斯業に從事する靑年にして往々學識に乏しく爲めに進んで充分の功績を奏する能はさる者あるは何そや蓋し斯學に關する書籍の刊行多からす又學修するに適切なる良書極て少なく隨て有爲の志を抱ける靑年の造詣未だ深からさるに因らずんばあらず是れ豈に斯界の一大恨事ならずや是に於て同人相謀り茲に玄同社なる一會を組織し各本務の餘暇土木叢書を著譯して隨時之を發刊し聊か以て斯業啓發の資に供せんとす是れ本書を發行する所以の旨趣なり。

前掲の旨主に因り土木叢書第一篇として「土木公式圖式解法」を刊行す原工學博士本篇に序して曰く「凡そ工事設計に關する計算は圖式に賴て之を爲すときは大に時間を省くの利益あり且つ其結果は大なる誤謬なきを以て應急の工事に適用し其効著大なるべし頃日金井彦三郎君多年の經驗修練に由り本書を著し以て斯界に益せんとす惟ふに斯界の業務行々將に繁錯多端に趨かんとするの時に當り此著あるは深く余の意を得たる所にして專ら其實用を主とし而

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して其解釋を加へたるか如きに至ては初學の徒をして容易に會得應用せしむるに在るなり云々」以て本篇の價値を知るべし

東京市技師
攻玉社工學校講師　金井彦三郎著

土木叢書第一編　**土木公式圖式解法**

正價金五十錢　郵税金四錢

目次

第一表ヨリ第三表マテ　木材梁強度ノ表
第四表　木材柱ノ強度
第五表　降雨排水量
第六表ヨリ第九表マテ　河川溝渠ノ流量
第十表ヨリ第十三表マテ　鐵管內ノ流量
第十四表　鐵管內流量ノ比
第十五表　流落水ノ馬力
第十六表　拱ノ楔石ノ厚サ
第十七表　杭ノ支持力

明治三十七年二月
發賣元　近藤商店
東京市京橋區日吉町十番地

尙ホ同人間現ニ操筆中ニ係ルモノハ「基礎」「市街鐵道」等アリ各々脫稿成版ニ隨テ順次發行スヘシ豫メ稟告ス

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

讀め◀三月五日發行▶讀め

戰爭美談

堀紫山、森大狂共編

今や征露の師海陸並ひ進んで敵の死命を制せり。日本軍人が奮戰の狀如何に健氣にして花々しきよ。本書其面目を描し出して壯烈を極む。外に江見水蔭の軍事小說及び諸名家の快文字、一讀懦夫をして起たしむるの慨あり。

△菊判立形美本△寫眞石版挿畫△紙數百五十頁△一部定價 金五拾錢（郵稅金貳錢）

發行所 東京市京橋區新湊町一丁目十七番地 由分社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

少年諸君の讀むべき戰爭雜誌

繪畫寫眞入

少年日露戰記

毎月三回發行

定價金六錢　第一號　三月一日發行

表紙は青年畫家山中古洞君の意匠に成るものにして最も美麗なる石版色を用ゆ　**口繪**は毎號青年畫家に請ふて愉快なる**戰爭畫**を挿み第一號には**大附錄**(石版色刷)として**旅順口の夜襲大海戰**の圖を挿入し**誌上**は**文壇諸名家**の執筆を請ひ**平易で分り安い日露戰爭記**を始めとして戰爭に關する**國民や少年の心得**から**陸軍海軍**に就いての說明を面白い愉快な物語で**戰爭の地理歷史、軍人の傳記逸話、國民の愛國美談**等有益なるものを收め其他趣味に富める邪氣の無い**戰爭お伽噺、戰爭遊戲**に至るまで戰爭の有らゆる方面に涉りて**少年諸君**に滿足せしめんとす而して**記事**には**繪畫**を挿みて興味を助け又**懸賞**を以て**戰爭**に因める**作文、ポンチ繪**等を募らん必ず**古今未曾有の大戰爭**は此**古今未曾有の雜誌**に依りて面白く記述せられ少年諸君の愛國心を養ひ、敵愾心を起さしむる事**最も多大**なるを信ず

定價(一部前金六錢郵稅金壹錢、六冊前金郵稅共金四拾錢、十二冊前金郵稅共金七拾五錢(郵券代用一割增の事))

發行所　東京市京橋區柳町五番地(電話本局三千番)　**郁文舍**

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA